

新学長に聞く

一人ひとりの人間が尊重され、個性と能力を存分に発揮できる
ダイバーシティの実現に貢献する逸材の育成を目指す

植木朝子新学長に

アナウンサーとして活躍する同志社大学OGの
八塚彩美さんがインタビューしました。

うえき ともこ
植木朝子
同志社大学学長

やつづか あやみ
八塚彩美さん
朝日放送テレビアナウンサー
〔同志社大学文学部英文学科卒業〕



キャンパスは多様性を実感し 互いに理解を深める絶好の場

八塚 学長就任、おめでとうございます。まず、現在の率直なお気持ちを聞かせてください。また、同志社大学初の女性学長という点でも注目されていますが、そのことについてはどのように感じておられますか。

植木 重責を担うことになり、緊張しています。現時点では不安の方が大きいのですが、これまで3年間にわたって副学長として様々な経験を積みさせていただいたので、それも役立てたいと考えています。また、初の女性学長として注目していただくことはありがたいのですが、「女性学長」が大きな話題にならないような時代に早くなって欲しいと思っています。それが望ましい社会だからです。

八塚 私も女性として心から願っていますが、例えば2019年の「ジェンダー・ギャップ指数」（世界経済フォーラム）で日本は先進国で最下位の121位でした。本当に残念です。昨年、「女性活躍推進法」も改正されたように、女性が広く活躍できる社会を待望する意識は根づいてきているのですが、まだ多くの課題があります。学長はどのように捉えておられますか。

植木 おっしゃる通りだと思います。これを推し進めるための政策も打ち出されていますが、まだまだ現実的には厳しい状態が続いています。ご指摘のように人々の意識は変化し、強まってきていると実感しています。問題はこれをどのようにして現場に反映させる

かという点です。とにかく一歩ずつでも、前へすすめていかなければならない。私も全力を注いで取り組みたいと思っています。

八塚 現在、社会はダイバーシティの実現を目指していますが、この課題はその中の一つのテーマだと思っています。性別とか、年齢とか、国籍などに関係なく各自の個性が認められ、自由に活躍し、伸びやかに生きることのできる世界が求められています。これに対して大学ができることは何だとお考えですか。

植木 大学は教育機関なので、やはり教育が一番大事だと捉えています。学生が互いに多様性を認め合い、より良い共存の在り方を創り上げていく。異なる価値観を持つ人々と融合しながらこれまで以上の社会を生み出していくという生き方が理想だということを全ての学生が納得できるまで教えなければならない。世界は一人ひとりの人間で成り立っており、その個々が尊重される社会がダイバーシティだということを深く理解させることが何よりも重要だと考えています。

八塚 国籍という点ではキャンパス内の留学生はこの15年間で186人から1137人へ増加したと聞いております。

植木 大学としては、さらに増やしていきたいと思っています。ただ、交流という観点では、まだ充分ではないと感じています。留学生と日本の学生がそれぞれ固まってしまう傾向が見られるからです。言葉などの壁もあり、ためらう部分があるのは分かるのですが、それを乗り越えてもっと活発に語り合

い、互いに理解を深めて欲しいと願っています。文化や考え方の異なる相手と向かい合い、打ち解けた中で率直に意見を交わすことによって新たな刺激を受け、数多くの貴重な学びが得られるからです。世界の多様性を実感し、認め合う絶好の機会が日々のキャンパスにあるのですから積極的に活かすべきです。

AIやIoTの時代に向けて 哲学や倫理からの考察も重要

八塚 2017年に同志社大学初の海外キャンパスである「EUキャンパス（同志社大学チュービンゲンEUキャンパス）」がドイツのチュービンゲン大学内に開設されましたね。

植木 同志社大学とドイツをはじめヨーロッパ諸国をつなぐ新拠点です。新島襄の教育理念の一つである「国際主義」を具現化し、その伸展を図ることを目的としています。すでに活発な学術交流を行い、全学共通教養教育科目で構成した「EUキャンパスプログラム」による第1回学生派遣も実施し、チュービンゲン大学で「DOSHISHA WEEK2019」も開催しました。本年も春学期に「ドイツ語・異文化理解EUキャンパスプログラム」を開講し、秋学期には「ヨーロッパ・スタディーズEUキャンパスプログラム」を予定しています。新島襄が欧州の教育機関を視察した後、最も注目したのがドイツでした。この新拠点を通じて新島襄が掲げた愛人主義に基づく「国際主義」を多くの学生に体験して欲しいと願っています。また、「アジアの中の日本」という観点からアジアも視野に入れています。

八塚 最近、男女の性別以外にLGBTQといった表現も生まれ、多様なジェンダー認識が広まっていますが、このような配慮についてはどのようにお考えですか。

植木 「男女共同参画推進室」を発展的に捉えた「ダイバーシティ推進室」を設置し、新たな対応が行える組織を創設したいと考えています。ご指摘のようなジェンダーに関する相談に即応する特化した窓口も必要だと考えています。

八塚 AIやIoTなどの理系的な知識の重要度が高まる中で、これを運用する際に哲学、宗教、倫理、心理などの文系分野の視点も改めて重視されています。この文理融合について学長はどのようにお考えですか。

植木 私の研究分野でも、例えば「崩し字」がAIで読めるといったことが話題になっています。また、古い史料に使われている紙の年代を正確に測定できるようになってきました。これから各研究においても文理融合はさらに重要になってくると実感しています。ただ、シンギュラリティーの問題に象徴されるように、テクノロジーの急激な進化がもたらす「漠然とした不安」を多くの人々が感じています。科学の発展と人類の真の幸福というテーマについては哲学的な思考や倫理的な考察などが不可欠であり、最先端の科学を誰にでも分かり易く説明するためには、「言葉の力」もこれまで以上に重視すべきです。



八塚 「言葉の力」というキーワードが出ましたが、国語力というのは非常に大切だと思います。これを高めるためにはどうすれば良いのでしょうか。

植木 やはり様々な分野の本を読むことです。論理的な著述も文学的な著作もできる限り数多く読むことが必要です。これが「多様性の理解」にも繋がります。「考える力」を養うのにも必ず役立ちます。これからの国際社会で活躍するためには、卓越したコミュニケーション力が求められますが、その前提になるのも「的確に理解し、深く思考できる」能力です。

新島襄の志を受け継ぐ 次代のリーダーを輩出したい

八塚 次代のリーダーを生み出すために、同志社大学が推し進めている教育



うえき ともこ

植木 朝子

同志社大学学長

1990年お茶の水女子大学文教育学部国文学科卒業。同大学助手などを経て、2005年同志社大学文学部国文学科助教授、2007年同大学文学部国文学科教授。2017年から副学長。同年より教育支援機構長も務め、2020年4月から現職。専門は日本中世文学。

My off time

子どもの頃から文学の世界に親しんでいた。父親が大学で哲学を研究し、母親は日本の古典文学を学んでいたという環境も影響しているかもしれないとふり返る。観劇や映画が好きで、演劇では能や歌舞伎から前衛劇まで広く鑑賞。映画で特に印象深い作品の一つがイランを代表する映画監督アッバス・キアロスタミの『友だちのうちはどこ?』（1987）。級友のノートを懸命に届けようとする愛らしい少年の健気な姿が心に沁みたと。時間があれば、大学時代に嗜んだ茶道や華道の世界にも再び触れてみたいと語る。

について聞かせてください。

植木 次の時代を担う人物を育成するために、新たに「同志社大学新島塾」を開塾しました。学問分野の専門性を高めるだけでなく、リーダーシップとフォロワーシップを兼ね備えた逸材の養成を目指しています。新島襄の志を継ぐリーダーを育てることを目的に松岡敬前学長が始められました。夏には合宿も実施しています。新島襄は「諸君ヨ人一人ハ大切ナリ」という言葉を遺していますが、学生の個性と能力を尊重し、互いに切磋琢磨する塾です。幕末に鎖国の禁を犯して渡米し、日本の未来を切り拓くために奔走した新島襄に続く有為の人物が生まれることを期待しています。

八塚 どのような大学を目指しておられるのか、改めて学長の志を聞かせてください。

植木 ダイバーシティ社会の実現に貢

献できる人物を輩出できる大学です。

実業界での多様性はイノベーションが第一の目的になりがちですが、多様性とは本来「利他的」なものだと私は考えています。そのような意味での多様性と寛容さを身につけた人間的に際立つ学生を育成する大学をさらに深化させ、発展させたい。これが学長としての志です。

八塚 学生の皆さんへのメッセージをお願いします。

植木 大学という多様な出会いの場で、相手の心を見詰め、深く理解し、受け入れることの大切さを学んで欲しい。また、解決すべき課題を自ら見出し、物事の本質を見極める知力を鍛えてください。その前提として重要なのは、「解」は一つではないということ。考えるプロセスを重視し、その過程で複合的な視点と柔軟な発想を培っていただきたいと願っています。